

古代地名領域にみる地域的特質

—茨城県における古代地名領域の現況分析をもとに—

建築史 中谷礼仁研究室 4年
1X13A013-3 石坂 駿

目次構成

【序論】

第1章 本研究について

- 1.1. 研究背景
- 1.2. 研究目的
- 1.3. 既往研究
- 1.4. 本研究の位置付け
- 1.5. 研究方法

【本論】

第2章 古代集落と千年村

- 2.1 はじめに
- 2.2 古代における古代集落の様相
 - 2.2.1 古代の社会構造
 - 2.2.2 古代の集落立地
 - 2.2.3 古代の集落形態
- 2.3 現代における比定大字の様相
 - 2.3.1 〈千年村〉研究について
 - 2.3.2 比定大字の立地特性
 - 2.3.3 比定大字の持続要因
 - 2.3.4 比定大字の土地利用

2.4 小結

第3章 古代地名領域の近代化

- 3.1 はじめに
- 3.2 近代日本の産業構造変化
- 3.3 茨城県内千年村の産業別人口構成
 - 3.3.1 分類手法
 - 3.3.2 分類方法
 - 3.3.3 分析結果

3.4 小結

第4章 農業優勢地域の古代地名領域（行方）

- 4.1 はじめに
- 4.2 概要（地勢, 古代～現代）
- 4.3 現状
- 4.4 小結

第5章 非農業優勢地域の古代地名領域(日立 / 神栖・鹿島)

- 5.1 はじめに
- 5.2 概要（地勢, 古代～現代）
- 5.3 現状
- 5.4 小結

第6章 考察

【結論】

第7章 結論

第1章 本研究について

1.1. 研究背景

現在の都市部において、居住地選定に大きく影響する要因の1つに鉄道がある。地縁に依らずに居住地を選定する際には「最寄駅」を考慮する場合が多いだろう。その一方で、地方では国鉄の民営化以降、つぎつぎと赤字路線が廃線となっているなど状況が大きく変化している。

近代以降敷設された鉄道や都市化を果たした住宅地がある一方で、国内には千年単位で持続してきた集落が多くある。そうした集落の立地や変容には、環境や国土利用の変化や災害を乗り越え継続してきた要因が見られるであろう。

こうした集落が近代の急速な社会状況の変化を経てどのような姿になっているか、人口減少に転じ都市化が収まりつつある今、評価する必要があると感じる。

1.2. 研究目的

20世紀以降、日本は近代化を果たし、人口拡大と都市化を進めてきた。これら古代集落も一部ではその影響を受け、百年前とは様相を大きく変えている集落も多い。

本研究では、20世紀初期まで長期にわたって持続的に継続していた集落やその周辺地域について時系列的な変化を追い、また現状との関係を見ることで、古代から現代に至るまでの地域の持続要因を明らかにすることを目的とする。

1.4. 本研究の位置付け

本研究は古代集落を対象とし、農村計画分野における農業集落研究と交通地理学における地域交通分析との二者間にまたがり分析を行うものである。

1.5 研究方法

本研究では、茨城県内において現在地比定されている古代集落を対象に、主に近代以降の産業構造変化とその背景にある歴史的な地域構造について、現在の公共交通機関による到達所要時間を切り口にして明らかにし、現在に至るまでの持続要因を探る。第2章では、古代集落の近代化以前、特に和名類聚抄記載以前の姿を重点的に捉える。古代集落一般の様相や社会的背景については考古学や歴史学の成果を文献からまとめ、古代集落の立地要件や存続要因については千年村プロジェクトの既往研究よりまとめる。第3章では、比定大字領域の産業別人口割合によって、茨城県内古代集

落の比定大字の現代の姿を捉える。第4章では、都市機能や交通路の空白地帯にある古代集落として、行方台地の古代集落について捉える。第5章では、都市の周辺に立地する古代集落として、日立 / 鹿嶋地域の古代集落について捉える。第6章では、茨城県内の古代集落の分類を行う。また、それぞれの現状について実見を行い、地域構造との因果関係を確認する。

第2章 古代集落と千年村

本章では、古代における村落の様相を捉えた。当時の社会構造から見た「郷」の状況を確認し、社会構造や徴税システムと既往研究により明らかとなった一部の古代集落の様相とを照らし合わせることで、1つの古代郷全体では農耕を中心とした集団であったことを確認した。また、そうした古代郷の中で現代に至るまで持続的に生産と生活が営まれてきたと考えられるものについて、既往研究をまとめることでその特徴を捉えた。

第3章 古代地名領域の近代化

本章ではまず、日本の近代化時期における農村の変容について、繊維産業から重化学工業へと発展を遂げた段階で第二次産業への労働力の流出が顕著に見られたこと、戦間期に農業国から工業国への転換が起き、就業構造が構造的に変化したことを確認した。次に、古代地名領域について、現在の就業構造比率をもとに、各産業の全国平均との比較によって6タイプに分類した。そこから、茨城県内の古代地名領域について①農業優勢地域(行方地域)②非農業優勢地域(日立 / 神栖・鹿嶋地域)の2つの特徴的なタイプを見出した。

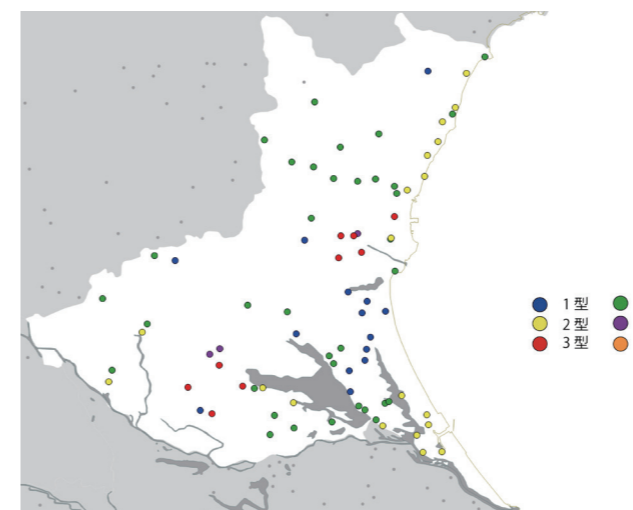


図1：茨城県内の古代地名領域の産業別就業者構成

第4章 農業優勢地域の古代地名領域(行方)

本章では、第3章で見出した2地域のうち、農業優勢地域とした行方地域の古代地名領域について取り上げた。この地域では農地が広くある一方で、台地上の土地をゴルフ場へと転用している例が多く見られた。このことはこの地域の古代地名領域に特徴的であった。

第5章 非農業優勢地域の古代地名領域 (日立 / 神栖・鹿島)

本章では、第3章で見出した2地域のうち、非農業優勢地域とした日立 / 神栖・鹿嶋地域の古代地名領域について取り上げた。この地域では大規模工場への労働力として転入者が増加しており農地の宅地が進んでいる一方で、そうした宅地をもとの大字とは切り離し異なる大字名称を与える例が多く見られた。

第6章 考察

本章では3、4、5章の内容を合わせて考察し、古代地名領域の現状が古代交通の断絶 / 断続といった背景によるものであること、直接の往来の少ない他地域からの到達所要時間を考えた時にも、農業優勢 / 非農業優勢などの特徴が表れることの可能性を指摘した。

第7章 結論

本論では、現在の古代地名領域の様相を検討するにあたって産業別就業者構成が一定の指標となることを示唆した。また、茨城県内の古代地名領域について特に第二次産業との関わりを指摘し、その特徴は過去から現代に至るまでの地域性を反映しているものであることを結論とした。

参考文献

- 郷土史
井上辰雄『常陸国風土記にみる古代』（学生社，1989）
 - 交通史
中川浩一『茨城県鉄道発達史』（筑波書林，1981）
宇田正『近代日本と鉄道史の展開』（日本経済評論社，1995）
 - 三木理史『地域交通体系と局地鉄道—その史的展開—』（日本経済評論社，2000）
 - 野田正穂・老川慶喜 編『日本鉄道史の研究—政策・金融 / 経営・地域社会—』（八朔社，2003）
- 図版出典
図1…筆者作成